

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531059

研究課題名（和文）

大学の資源を活用した協働的支援によるキャリア教育・就労定着プログラムの開発

研究課題名（英文）：Development of career education and employment support programs through collaborative support that utilizes the resources of universities

研究代表者

松田 直（MATSUDA TADASHI）

高崎健康福祉大学・人間発達学部・教授

研究者番号：60099942

研究成果の概要（和文）：本研究は、卒業後の就労実態を踏まえたキャリア教育の見直しの必要性を踏まえ、大学の人的・物的資源を活用した支援のあり方について実践的に検討した。学生ジョブコーチを活用した現場実習や就労支援の実践的検討や、特別支援学校卒業生の事業所での実態調査を実施し、その結果に基づいて特別支援学校におけるキャリア教育の見直しを図り、「作業的な学習を行う際の配慮事項」を作成し、この観点を踏まえた授業の実施・改善を行った。

研究成果の概要（英文）：In the present study, we conducted a practical investigation of approaches for support that utilize the human and material resources of universities based on the need for review of career education in consideration of the actual condition of employment after graduation. Specifically, we conducted a practical investigation of practical training and employment support that utilize student job coaches, performed an actual condition survey at an office for graduates of special-needs schools, reviewed career education at special-needs schools based on the results, prepared “considerations in implementation of occupational learning”, and implemented and improved classes based on this perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：特別支援学校，知的障害，キャリア教育，大学の支援，就労支援，学生ジョブコーチ

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 自立支援法（現、総合支援法）などを背景に、近年、より多くの障害者が一般就労できるような支援体制を構築することが各事業主に求められているが、その一方では、特別支援学校高等部等の教育の場において、より一般就労につながるような移行支援のあり方が求められている。本研究グループでは、障害者の就労支援について2000年(平成12年度)より継続して研究を進めてきた。大学を資源として捉え、就労の場として大学を活用し、学生を支援者として介入させ、専門家としての大学教員が関与することで高等部の現場実習をより効果的なものとし、就労に結びつくことを実証的に確認し、学内で障害者雇用を進める関係者と連携しつつ継続的に研究・実践を進めることで協動的支援体制を構築してきた。

(2) 継続的な研究で培った、大学の資源を活用した協動的な現場実習支援を発展させ、附属特別支援学校高等部、及び小・中学部での授業全体と連携して就労支援を進めた。卒業生と継続的なつながりがある附属特別支援学校の特性を活かし、実態に踏み込んだ形で卒業生の追跡調査を実施し、離職率が低い企業での取り組みを調査することにより、その結果を踏まえ、離職したのちの再就職への対応や、離職防止の予防策、学齢期からのキャリア教育に反映できるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

特別支援学校高等部等の教育の場で、より一般就労につながるような移行支援のあり方を目指し、キャリア教育をより充実させ、就労支援を学齢期から継続して行うための具体的な方策を検討する。

### 3. 研究の方法

これまでの成果を実践場面検証すべく、附属学校教員、大学教員、および校内食堂棟の事業所の関係者間での連携のもと、以下の(1)から(3)について、それぞれの研究を実施した。

### 4. 研究成果

(1) 学生ジョブコーチによる現場実習前支援のあり方に関する検討

群馬大学教育学部附属特別支援学校の高等部に在籍していた生徒が、現場実習を一般事業所（飲食業務のチェーン店）で行った際に、学生がジョブコーチとして協動的支援を実施した事例（生徒は卒業と同時にアルバイトとして採用された）について、学生ジョブコーチ自身が事前に業務体験を積み実習生

への支援を効果的にしたことを含めて経過を詳細に分析し、成果を整理した。

本事業所（飲食業）は初めて知的障害者の実習生を受け入れる事業所であり、現場実習の全日程に学生ジョブコーチが職場に入り、常時支援に当たれる体制をとった。業務内容の把握及び実習生の把握においては、補助カード「作業手順と留意事項」の情報をもとに支援内容を検討したことにより、学生ジョブコーチと進路担当教員が共通のイメージをもって業務内容を把握できた。また、事前に学生ジョブコーチが職場に入って業務を体験することで、実習前に職員と関わる機会を得ることができたため、実習生の特徴や現場実習に関する情報を事前に職員に伝えることができた。学生ジョブコーチにとっても、事前に詳細な業務内容などの実習に必要な情報を得ることができたため、安心して支援に臨むことができた。また、このことは、職員にとっても、実習生の情報が不足することに起因する不安感の払拭や、実習で想定される役割を思案し易くすることにより、過度の負担感が軽減することとなった。

実習前に附属特別支援学校において、実習生・進路担当教員・担当教員・学生ジョブコーチで話し合いの機会を設けたことは、実習者と学生ジョブコーチの信頼関係を構築するきっかけとなった。実習においては、学生ジョブコーチが、全実習日程において実習先に入ることにより、余裕をもって実習生の動向を見守ることができ、必要最小限の支援で実習生を支援することができた。しかし、業務体験が短期間だったため、学生ジョブコーチは業務把握はできても、理由づけを伴う丁寧な指導できるまでには至らないことが多かった。飲食業の特徴として、作業の変更事項が多いため、実習者が周囲を確認をとってから動けることが重要である。そのため、実習生自身が事業所の特徴をある程度把握し、具体的にどういった場面で、どのように確認すればよいのかを知り、本人が周りの職員に確認をしてから作業に当たれるように学生ジョブコーチが促していく必要がある、ということが明らかになった。

(2) 大学内の食堂における学生ジョブコーチの活用

#### 就労意識の形成

対象者は群馬大学内食堂で清掃作業を行い、最初の3カ月程は学生ジョブコーチが対象者に寄り添って、仕事の手順などを細かく支援した。経過に伴い、互いの距離を離れていき、支援が必要な時に支援を行った。

対象者である聾重複障害者の主なコミュ

ニケーション手段は口話と筆談であった。聴覚障害があることが判明したのが高等部入学後で、補聴器の装着開始もその時からであった。補聴器装着時には聞き慣れた単語の受聴は可能で、簡単な単語の意味も理解することができる反面、日常的に用いられるはずの語彙を獲得していないことが明らかになった。また、音声のみで話しかける時よりも、身振りや手話が同時に行われた時の方がよく相手を見ている様子だった。そこで学生ジョブコーチは対象者に対して、手話と音声を使って支援や会話をした。さらに対象者は大学の手話サークルに週に一度通うことにより手話を学んだ。それにより、受け身であったコミュニケーションに対して積極的になり、伝わるという経験を重ねて自信を持ってコミュニケーションがとれるようになった。対象者と学生ジョブコーチによる手話の会話を見た同僚職員が手話に興味を持ち、学生ジョブコーチから教わった手話で対象者に話しかけるようになり、対象者は笑顔で一生懸命仕事をするようになったり、同僚職員に手話を教えたりする様子も見られるようになった。

対象者が高等部を卒業し、実習を重ね学校に行かなくなるにつれ、勤務態度や表情に変化が表れるようになった。集中力がなくなり、動きや聞こえ方が鈍いのである。それは対象者が、高校生・大学生・社会人の違いが分からず、自分がどのような立場にいるのかが理解できないままだったからであった。そのため、卒業したことを確認したり日々出勤したりすることで、高校生ではないことを徐々に理解していったり、実際の大学の講義に参加したり、かつてボランティアで関わった大学生達が真剣に勉強する様子を見ることで、大学生ではなく、社会人であることを理解していった。

対象者は仕事をしたら給料がもらえ、それを使ってやりたいことができることまではわかっていたが、夢の叶え方が分からず不安で仕方がなかった。そこで具体的に車の免許をとるといふ夢を、教習所の様子を見たりテキストを勉強したりすることで身近にしていた。

また、対象者の勤務態度は学生ジョブコーチが支援に入る日と入らない日では明らかに違っていた。これは賞賛してくれる人の存在を求め、フィードバックをしてくれる人の存在なしでは仕事ができない状態だったためである。しかし、一般就労で、厨房等で働く同僚職員とは離れた場所で、1人で清掃作業をする対象者に求められていたのは、フィードバックされない中でも、幸せを感じ、集中して仕事をするのであった。そこで、毎日自己評価を行い、同僚職員に確認してもらってフィードバックを得て幸せを感じるこ

とで次の日も頑張ることができること、最終的には月に1度もらう給料をフィードバックとしてとらえ幸せを感じるようにした。

このように、対象者が「働く」ことを知るうえで必要だった支援は、正確な情報を自然に得られるように、対象者自身が手話を獲得すること、学生ジョブコーチが手話を使うことで正確な情報を対象者に伝えること、社会人であることを嬉しく思い、仕事をするので幸せを感じられるようにすることの3つであった。

#### 業務の正確さと持続性に関する支援

教育学部のあるキャンパス内の生協食堂で現場実習を重ね、その後正式に3年間の期限付きで雇用された聾重複障害者に対して、学生のジョブコーチがどのような支援をすれば清掃作業の正確さと持続性を実現し、併せて職場の同僚との係わり合いを円滑にし、職場環境への定着を図れるか等の内容について、毎月の就労支援プロジェクトミーティング(以下、ミーティングと略記)の中で検討を行った。

ミーティングの参加者は、本研究における研究代表者・研究分担者の他に、学内食堂の職員、キャンパス内の他の事業所の職員、市内の障害福祉サービス事業(就労移行支援(一般型)・就労継続支援(B型))の職員、学生ジョブコーチおよび就労支援に関心のある学生、附属特別支援学校の教員などで構成された。

#### a) 就労支援第1期

ミーティングの場で、聾重複障害者が勤務時間中に呆然としていることが多いことが課題として挙げられた。解決案として、学生ジョブコーチが仕事のモデルとなって示すことを方針とした。また、就労支援を進めていく中で、支援対象者と学生ジョブコーチとの信頼関係を築いていく必要性を確認した。学生ジョブコーチがモデルとなって一緒に仕事をしていく中で、最初はどのように清掃していいのかわからない様子であった支援対象者が、学生ジョブコーチをモデルとして参照しようとする様子が確認された。

#### b) 就労支援期第2期

1ヶ月ほどの就労支援を通して、支援対象者が学生ジョブコーチと一緒に仕事をする人物であるという認識が強まり、学生ジョブコーチが支援につく時は一生懸命仕事をしているという様子が確認された。しかし、学生ジョブコーチがつかない時は以前と変わらず、呆然としていたり、作業が雑になったりする状況であり、支援対象者の仕事への取り組みに大きく差があることが問題として提起された。

支援対象者に学生ジョブコーチの様子をモデルとして参照する能力があることを受

け、支援対象者と同じ作業のモデルを示し、支援対象者の作業の精度を高めていくことが方針として定められた。

学生ジョブコーチが同じ作業のモデルを示すことで、清掃作業における箒の使い方においては改善がみられ、床掃きの技術が向上していることが確認された。しかし、床磨きについてはモデルを示すだけでは不十分であることが確認された。床磨きにおいては、床の汚れた部分を支援対象者が磨くよう積極的に誘った。汚れた部分と汚れが落ちた部分を一緒に比較し、汚れが落ちたことを支援対象者が実感することにより、床を「きれい」にするという意識が芽生え始めてきたことが確認された。一方で、ゴミを箒で掃いて、ちりとりで取る、清掃済みの箇所から未清掃の場所へ移動する、といった工程の移行に困難があることが確認された。

そのため、支援対象者が次の工程に移行するために必要な支援は何かを検討するために、学生ジョブコーチが工程の移行を促すことを極力控えることとした。その結果、支援対象者は学生ジョブコーチと同じ作業をするものの、自分から工程の移行はしない様子が見られた。床磨き工程では、学生ジョブコーチが、「(支援対象者が)良いと思ったら、次(の場所に)行って良い」と伝えたと、次の清掃場所へ移動した。こうした様子は作業中に何度か見られ、支援対象者が自ら判断して、次の作業に移行することが難しいことが確認された。

この結果をもとに、課題の1つである、床を掃く工程からちり取りでゴミを取る工程に移行するための支援を検討した。床を掃く工程の終わりを明確に示すことで、支援対象者がスムーズに工程を移行できるのではないかと考え、床面にスタートとゴールを設定した。スタートは、扉から始め、ゴールにはちり取りを2つ置いた。この際、「スタートには戻らないこと」「1回できれいに掃くこと」を伝えた。また、床磨き工程においても同様に示した。スタートとゴールを示したことで、各工程の移行を自分自身で判断することが容易になってきた様子が確認できた。次の工程に移行できない場合も、学生ジョブコーチがゴールについて意識するよう促すと、次の工程に移ることができた。床を掃く工程からちり取りでゴミを集める工程、床磨き工程から床を掃く工程においては支援対象者が自らの判断で移行する様子が確認されるようになったが、ちり取りでゴミを集める工程から床磨き工程への移行は難しい様子であった。

#### c) 就労支援プロジェクト第3期

支援の方針を決めるにあたって、支援対象者の居住地域の障害者就業・生活支援センターの職員をまじえてミーティングの場を設け

た。支援者が業務に従事する様子を観察してもらったところ、「床を磨く際は、磨く場所を細かく区切る」「雑巾やスポンジでの床の磨き方の手順をはっきりと示す」という助言を受けた。

センター職員の助言を参考に、掃き方と磨き方の指示を改善した。床面を掃く際は、横から縦と掃くこと、一度掃いたら戻らないことを伝え、床面を隙間無くゴールに向かってゴミを集められるよう、また、床を磨く際は左手側から、体の外側へ磨くよう具体的に指示し、学生ジョブコーチが見本を見せた。

その結果、床面を掃く工程においては、支援対象者は床面を隙間無く掃くことができるようになった。また、床磨き工程においても、今までは撫でるように拭いていたのが、体の外側へ一方向に拭くことで力を入れて磨く様子が見られた。さらに、床を磨いて場所を移動する際、自分が磨いた場所を避けて通ろうとする様子も初めて見られた。

床磨き、床を掃く工程において、効率的な清掃方法を具体的に提示すると共に、学生ジョブコーチが適宜アドバイスをすることにより、作業の質的な向上と、支援対象者の「きれい」に対する意識の高まりが確認されるようになった。

さらに、支援対象者が床磨きを行いやすくなるよう、センター職員の助言を踏まえ、床磨きの際にビニールテープで床面に区切りをつけ、区画を設けた。区画を設置することで、床面全体を清掃するという意識が高まり、全体を磨くことができた。また、区画ごとの汚れに注目し易くなったことが確認された。

#### d) 就労支援プロジェクト第4期

ミーティングの場において、学生ジョブコーチが清掃方法の手順を示したことで、支援者が作業の見通しが持ちやすくなったことや、自分の作業に自信が持てるようになったという評価が報告された。一方で、学生ジョブコーチが支援についていない際は支援対象者の作業状況が良くない状態は変わらず、支援対象者に対する職員の印象が良くないということも確認された。学生ジョブコーチが居なくても、居るときと同様に意欲的に作業に取り組めるような支援をすることが第4期の方針として定められた。具体的には、支援対象者が作業により見通しが持てるように、学生ジョブコーチが作業の取り組みの様子を実況して伝え、さらに自信をつけるために作業中の良い点も積極的に褒めていくこととした。

床磨き工程、床を掃く工程においては、支援対象者の技術の向上と学生ジョブコーチが行った支援の時期・内容が一致した。清掃をする際の「きれい」という意識の変容について、支援の段階が進んで行くにつれ、「きれい」にするという意識の高まりが見られた。

床を磨く際に、磨く前と後の床の状態の比較、磨く手順を示した支援が「きれい」にすると意識の高まりについて有効であったことが確認された。このことから、支援対象者の作業技術の向上について支援する際は、技術の向上を目指すだけでなく、対象者の、その作業に対する意味・意義を押し量りながら支援を進めていく必要があることが示唆された。

床磨き、床を掃く工程においては技術・意識の向上が見られたが、ちり取りでゴミを集める工程から別の工程に移る場面においては、支援の段階を進めることは難しかった。

支援対象者の様子から、知的障害がない場合は、「ある程度」ゴミがなくなれば次の工程に移るが、支援対象者の場合は、「ある程度」を自ら設定し、それを達成し、自ら区切りをつけることに困難があったと考えられる。

知的障害者にとっては、判断基準が明確な場面では、次の工程への自主的な移行は可能であるが、ちり取りでゴミを集める工程のように、目処をたてて作業することが必要となる場面では、自主的な移行は難しくなる。就労支援を行う場合には、こうした認知の特性に配慮することが必要であることが明らかになった。

### (3) 特別支援学校の卒業生の実態調査を踏まえた授業改善

平成22年度は、群馬大学教育学部附属特別支援学校の卒業生が通っている事業所(一般就労4名、福祉就労21名)を対象に、「事業所が卒業生への支援で大切にしていること」と「事業所が学校に期待すること」について調査を行った。

「作業時において重視していること」について調査した結果、「人とのかかわりを大切に、聞くこと、話すことに関する基礎的な力」、「職場において報告・連絡・相談できること」、「長い時間、同じ作業ができること」、「自分の仕事に対する判断ができること」等を重視していることが明らかになった。

これを受け、「実際の作業場面においては、一人で行うことと、仲間と一緒にいることの両方を大切にする」、「職場でのコミュニケーションや集団行動につながるように、話すことや聞くこと、自分の思いを表現することを大切にする」、「報告・連絡・相談とともにあいさつをする、時間を守る等、勤務態度を大切にする」等といった「作業的な学習を行う際の配慮事項」を見出し、同校の授業改善を試みた。

平成23年度は、群馬大学教育学部附属特別支援学校高等部の生徒に対して、ビルメンテナンス作業(廊下、階段、窓等の清掃)を試行する機会を提供し、平成22年度に見出した「作業的な学習を行う際の配慮事項」に

ついて検証を行った。この授業実践をとおして、生徒はビルメンテナンス技術を向上させる中で、作業や準備、片付けをすること、安定したペースで作業を続けること、目標に向けて主体的にチャレンジすること、見通しをもって行動すること、支援者の指示に応じること、報告・連絡・相談をすること、仲間とやりとりをすること、姿勢を保って長時間作業を続けること、手順票を参考に一人で作業を進めること等、事業所が重視していることについて、学習することができた。本科研では、この学習が他の作業的な学習や産業現場における実習(現場実習)にどのように発展的につながるか、キャリア教育の視点から検討を加えた。

最終年度である平成24年度は、群馬大学教育学部附属特別支援学校高等部の生徒に対して、新たな作業種として、喫茶サービス作業(校内カフェにおけるコーヒー等の飲み物の提供)を試行する機会を提供し、平成23年度に引き続き、「作業的な学習を行う際の配慮事項」について検証を行った。この授業実践をとおして、生徒は自己のコミュニケーション能力を生かして人(客)とかわることや、仲間と協力して校内カフェを企画・運営することを学習することができた。接客サービスを行う際には「集団の中で活動すること」を大切に、生徒同士や生徒と教師間で連絡・報告を確実にを行うようにした。来客前に身だしなみを整える際は、「相手に好感を与える態度をとること」を大切に、自分の身だしなみを確認したり生徒同士で確認し合ったりした。また、「役割を果たすこと」を大切に、生徒が自分の役割に主体的に取り組めるようにした。開店前の準備時には、「スケジュールにそって行動すること」を大切に、生徒に確認させた。「金銭の管理」も大切に、報酬を得る喜びや、金銭を取り扱う責任を感じられるようにした。授業の実施・改善にあたっては、本科研の代表者と分担者の全員が授業を参観するとともに、研究協議を繰り返した。協議結果を基に接客の対象として来校者を招いたり、客の意見を活動に反映させたりする等、学習活動を改善することにより、生徒は、働く意義や喜びを感じることができた。その成果は同校の研究紀要として集約された。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

真下和将、仲濱佳穂、山本綾乃、松本 優、金澤貴之、霜田浩信、松田 直、大学の資源を活用した就労支援の在り方に関する研究 学生ジョブコーチが有効な支援

を行うために 群馬大学教育実践研究, 査読有, 第 30 巻, 2013, 135-144 頁  
矢端香奈恵, 金澤貴之, 霜田浩信, 松田直, 聾重複障害者の就労意識の形成に関する実践的研究, 一般就労をする T さんへの学生ジョブコーチによる就労支援の記録から, 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 査読有, 第 61 巻, 2012, 149~159 頁  
北爪麻紀・金澤貴之・松田直, 大学の資源を活用した現場実習のあり方に関する一考察 学生ジョブコーチの「実習前業務体験」の実践から, 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 査読有, 第 60 巻, 2011, 187~200 頁  
群馬大学教育学部附属特別支援学校, 将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成 子どもの過去と将来をつなぐ授業実践, 群馬大学教育学部附属特別支援学校平成 22 年度研究紀要, 査読無, 第 31 集, 2010, 1-76 頁  
群馬大学教育学部附属特別支援学校, 将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成 子どもの過去と将来をつなぐ授業実践, 群馬大学教育学部附属特別支援学校平成 23 年度研究紀要, 査読無, 第 32 集, 2011, 1-57 頁  
群馬大学教育学部附属特別支援学校, 将来にわたって豊かな生活を拓く児童生徒の育成 子どもの過去と将来をつなぐ授業実践, 群馬大学教育学部附属特別支援学校平成 24 年度研究紀要, 査読無, 第 33 集, 2012, 1-50 頁

〔学会発表〕(計 1 件)

霜田浩信, 星野常夫, 菅野敦, 青年期・成人期知的障害者の生活実態と課題 家事手伝い習慣と生活実態, 日本特殊教育学会第 49 回, 2011 年 9 月 25 日, 弘前大学

〔図書〕(計 1 件)

上田征三, 特別支援教育を取り巻く関係領域 医療保険・福祉・労働, 石部元雄・柳本雄治編著「特別支援教育 理解と支援のために」(改訂版), 2011, 福村出版, 86-101 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 直 (MATSUDA TADASHI)  
高崎健康福祉大学・人間発達学部・教授  
研究者番号: 60099942

(2) 研究分担者

金澤 貴之 (KANAZAWA TAKAYUKI)  
群馬大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 50323324

霜田 浩信 (SHIMODA HIRONOBU)  
群馬大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 80364735

吉野 浩之 (YOSHINO HIROYUKI)  
群馬大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 60438637

上田 征三 (UEDA YUKUMI)  
東京未来大学・こども心理学部・教授  
研究者番号: 50309639

(3) 研究協力者

松本 優 (MATSUMOTO YUTAKA, 群馬大学・教育学部附属特別支援学校・教諭)

矢端 香奈恵 (YABATA KANAE, 群馬県立みやま養護学校・教諭)

飯塚 麻紀 (IIZUKA MAKI, 伊勢崎市立赤堀小学校・教諭)

真下 和将 (MASHIMO KAZUMASA, 群馬大学・教育学部附属特別支援学校・教諭)

仲濱 佳穂 (NAKAHAMA KAHO, 群馬大学・教育学部・学部生)

山本 綾乃 (YAMAMOTO AYANO, 群馬大学・教育学部・学部生)